

学校で募金提案 ■ 3歳の娘、食欲不振・ぐずり

経験したことのないような激しい揺れ、そして、津波に押しつぶされる町の映像……。東日本大震災は、子どもたちにも強い衝撃を与えました。「困っている被災地の役に立ちたい」。そんな思いで動き始めた子どもたちからの投稿も届いています。

(相関真樹子、武井宏之)

「役に立てたら」願う

18日と22日に校門前で募金活動をしました。世田谷区立松丘小学校6年の折笠愛実さん(12)から、こんなメールが寄せられました。震災後、先生に相談したところ、校長先生が賛成してくれたそうです。早速、訪ねてみました。

18日朝の松丘小。正門と南門の2カ所に募金箱を持った

6年生たちが並び、「おはようございます。募金お願いします」と呼びかけた。募金箱は牛乳パック製の手作り。登校してきた児童が家から持ってきたお金を入れるチャリンという音と、「ありがとございます」という声と同時に響く。児童だけでなく、通りかかった大人も、「がんばってください」と言いながら募金した。

震災に思うこと

「みんな積極的に協力してくれた」と喜ぶ愛実さんもお小遣いから募金した。愛実さんの叔母一家も、福島第一原発に近い町から新潟県へ避難している。先月、愛実さんの中学合格のお祝いを贈ってくれて、電話でお礼を言ったばかりだった。

東京では、過剰な「買いた

め」の動きが広がった。母からは「買い物に行ったらスーパーマーケットの棚に何もなかった」と聞く。愛実さんは「被災した人たちは、食事も十分に食べられていない。東京の人は、少し我慢した方がいい」と思う。

そして、自分たちが始めた募金活動が「ほかの小学校にも広がり、被災地の役に立てたら」と願っている。

外と元気でした。しかし、連日連夜の余震、そして、情報入手のためつけっぱなしにするテレビからは津波の映像。4日目には食欲不振になり、我々親も不安を感じているのが伝わったのか、かなりグズるようになりまし。

大人は被災地のことを思うと、命があるだけ、食べる物があるだけでありがたいことだと理解できます。その価値観を娘にも押しつけようとしていましたが、それは間違っていたような気がします。

これに気づいてからは、地震情報はラジオやインターネットでの入手にしました。娘には被災地の方に対して、いま家族でできることを一緒に

「3歳の娘がかなりのストレスを感じているようです。板橋区の会社員、杉山友輝さん(37)からはこんなメールが寄せられました。

地震当日、保育園での避難はしっかりできて、当初は意

外に出ました。止まっていた自動車や電柱も大きくゆれて、一人だったらすごく怖かったと思います」

綿貫さんの地域の被害は停電だけで、12日夜には復旧した。ただ、地震があった11日は夕方から雪が降り、夜には気温が氷点下になり、暗闇と寒さの中で過ごした。「その夜は10分おきくらいに余震があり、真っ暗の中で不安になりました」。母親のみちるさんはそう振り返った。

おいづかいかから募金
2人で書いた手紙を寄せた東久留米市の双子の小学2年生、鳥居世君(8)、和さん(8)。「地しんにあつたおおせいの人たちに何かをしてあげることが出来ないけれど、電気をせつやくすること、おこづかいの中から少ないけれど、ぼ金をすることにしました」

停電でトイレ一緒に
小4と小1の娘が2人だけで夕方の計画停電を過ごした府中市の地方公務員、内藤智津子さん

子どもも心震えた

北区立王子第三小学校の3年生70人が節電を呼びかけるポスターを描いた。学校の廊下に掲示している。同小の西野厚教諭撮影



朝日小学生新聞
リポーターから

父親の仕事の関係で転勤が多く、新潟県中越地震

スリッパのまま建物の外へ

(2004年)や岩手・宮城内陸地震(08年)も経験したという盛岡市の綿貫りらさん(5年)。「写真」は「最初は『また地震か』と思いましたが、すごく大きくて驚きました」。

地震が発生したときは、母親と弟と一緒に皮膚科の病院にいた。「警報が鳴って電気が消え、スリッパのまま、お母さんにつかまっ

「子供たちにとって、生まれて初めての停電。姉妹2人で暗くてこわいトイレに入っただけです。『水を流すのは1回にしたよ。手も2人で一緒に洗ったよ。水の節約になったよね』と帰宅した私に話してくれました」

おいづかいかから募金
2人で書いた手紙を寄せた東久留米市の双子の小学2年生、鳥居世君(8)、和さん(8)。「地しんにあつたおおせいの人たちに何かをしてあげることが出来ないけれど、電気をせつやくすること、おこづかいの中から少ないけれど、ぼ金をすることにしました」

停電でトイレ一緒に
小4と小1の娘が2人だけで夕方の計画停電を過ごした府中市の地方公務員、内藤智津子さん